

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

【本プログラムへの参加を通して感じたこと・学んだこと】

私がこのプログラムに応募したきっかけは、農業、特に食料問題に強い関心があったからだ。日本の食料自給率の低さや食料廃棄の問題に課題意識を持っていたが、調べるうちに、これらは国内に限らず国際的にも深刻な課題であることが分かった。そこで、世界の農業や食料問題についてより広く学びたいと考え、本プログラムへの参加を決めた。イタリア研修では、課題に取り組む国際機関の訪問や、イタリアの食料生産や食文化を学べるファームステイなど、個人旅行では得られない貴重な体験ができることに魅力を感じた。また、能登半島地震の被災地を訪れ、現地の方々の話を聞きながら「創造的復興」について考える機会があることにも強く惹かれた。これは、大学生という今だからこそ意味のある経験だと感じた。

プログラムへの参加の前後で、私の中で「復興」という言葉の意味が大きく変わった。以前は、復興とは壊れた建物を直し、水道や道路などのインフラを整備することだと考えていた。しかしそれは「復旧」にすぎず、人々の生活が元通りになることとは異なる。復興とは、その土地に暮らす人々の暮らしや文化を取り戻し、さらに未来を見据えた新しい社会を創造することなのだ気づいた。さらに「暮らし」とは、単に同じ地域で同じ仕事をするのではなく、大切な人たちと支え合いながら、地域の特性や資源を生かした持続可能な仕組みの中で生きていくことである。

能登で多くの方々からお話を伺ったが、誰一人として暗い表情をしている人はいなかった。震災による心の傷や、失ったものの大きさ、先行きの見えない不安を抱えながらも、皆が「今できること」を考え、行動し続けていた。それは、能登への強い愛情と、地域の人々とのつながりが支えになっているからこそだと思う。

【今後に向けて】

私は、今回のプログラムで、たくさんの方々に関わることができた。特に国際機関を訪れた際にお話しした職員の方々のそれぞれが国際的な視点で課題意識を持って仕事に取り組んでいる姿、国籍や年齢、性別などの関係ないグローバルな環境で働く様子が強く印象に残っている。就職活動を控える者として、これから何を軸に仕事を考えていこうか悩んでいたが、今回の経験を通して、自分が本気で解決すべきと考える課題に本気で取り組めることが私にとって一番大きな要素であると感じた。これからは、自分が「これだ」と思える課題を見つけるために、日頃から世の中のさまざまな出来事に関心を持ち、調べ、考える姿勢を大切にしていきたい。

【次期参加学生へのメッセージ】

もし、プログラムへの参加を迷っている方がいれば、ぜひ挑戦してみることを強くおすすめします。私自身も、大学ではっきり専門といえるようなものがないと厳しいかな、とか初めての海外が怖いな、と考えて迷っていましたが、思い切って参加して本当に良かったと思います。この数か月で、いろんな場所へ行き、いろんな人と話せたことは私にとってかけがえのない経験になりました。世界農業遺産について深く学びたい方、能登の創造的復興に関心のある方はもちろん、私と同じように食に関心がある方や日本と世界の文化や価値観の違いに興味がある方、能登の歴史や伝統を現地で触れて学びたい方など、このプログラムに関係にあることに少しでも面白そう、と感じた方にはぜひ参加していただきたいです。大学の講義だけでは得られない、現地でしか学べない発見や出会いがきっとあるはずです。皆さんにとって、実りの多い研修になることを心から願っています。